



中山道69次を歩く(5)

中間地点から大湫宿まで

中山道の旅は、第13回から、『中山道の歩き方』(学習研究社刊)の企画・編集をした同期生、清水淳郎さんが加わったので、案内、解説付きで一層楽しくなった。

第14回は11月27日、原野駅から中山道の中間地点を目指す。雪化粧した木曾駒ヶ岳が美しい。「中山道東西中間之地」の碑には、江戸へ六十七里二十八町とある。栗本集落を過ぎ、しばらく国道を歩くと第37次・福島宿入口。福島関所が再建されている。宿場の中心部は昭和の大火で焼失したが、焼けなかった上ノ段には旅籠屋、商家、水場などが残っている。

上松宿への道中には、有名な難



雪が残る馬籠峠頂上

所、木曾の棧跡があるが、歩道のない国道で、歩くのは危険とのことからバスを利用した。上松宿には尾張藩の材木役所が置かれ、木材の集散地であった。寝覚ノ床の見物客もあり、にぎわったようだ。寝覚ノ床に隣接したホテルに泊り、温泉で旅の疲れを癒やした。

翌朝、寝覚ノ床を見物。静寂に包まれた碧い淵、灰白色の花崗岩が碧い水に映り、何とも美しい。2⁺ほど行くと、広重の絵にもなった小野の滝。明治になって、滝の上に鉄道を通してしまったのが惜しまれる。

倉本を過ぎると、旧道はほとんどなく、国道を歩いて須原宿へ。大木をくり抜いた水舟があちこちに置かれ、露伴、子規の碑が立てられ宿場の風情が今も残る。

第15回は2011年最初の旅。3月26日、第40次・野尻宿から三留野宿へ。樹齢数百年の本陣の枝垂れ梅がすばらしい。木曾川に架かる桃介橋(国重文)を渡ってみてから、妻籠宿への山道に入る。

妻籠宿は昭和40年代から歴史的景観を守ることに取り組んできた

ので、本陣(復元)、脇本陣をはじめとして往時の宿場の町並みが良く保存されている。旧旅籠・松代屋に泊り、翌日、雪の残る山道を馬籠宿に向かった。馬籠峠を過ぎると、目の前が開けて、恵那山が展望できる。展望台には、旧山口村が岐阜県に越県合併した記念碑が立てられている。

馬籠宿は坂の宿場、中津川・美濃の国が見渡せる位置にある。藤村の生家、本陣は明治の大火で焼け、祖父父母の隠居所と井戸が焼け残っている。

落合宿への道は、十曲峠の下り道、約1⁺も続く石畳の道でひざがガクガクしてしまった。落合宿では、加賀藩から贈られたという本陣の門と、しゃちほこが付いた母屋が威容を誇っていた。

第16回は4月23日、第45次・中津川宿へ。幕末、桂小五郎が潜んでいたという料亭が今も残り、資料館には、幕末の人物往来を記録した本陣文書が残っている。

大井宿は江戸と京の間の戦略的要衝にあり、六力所に枅形が造られていた。枅形にある旧旅籠・角屋に宿泊。翌日、西行塚、十三峠を越えて大湫宿へ到達。山間の静かな宿場で樹齢1300年の大杉が迎えてくれた。

清水計枝(64期)

連綿と続く「凶南会」

田中小出身の同窓生の会

ふる里の信州に帰った時、周りの山々や木々と出会えるのは何とも言えません。千曲川の流れる石ころも昔と変わっているようですが、何か心をほっとさせてくれます。烏帽子や浅間山は昔のままです。浅間山の稜線が右に流れるのを見ると昔に帰ることができません。

私が生まれた所は海野宿の西の外れで大屋駅に近いところで。学んだ小学校は田中小学校。現在の東御市にあります。

東御市の教育構想は「あいさつをしよう・本を読もう・汗を流そう・テレビのスイッチを切ろう」。思わずエールを送りたくくなります。その田中小学校を出て上田高校に入学した者の集まりがあり、「凶南会」という名が付いています。

凶南会には、なかなかの意味があります。広辞苑には凶南とは鵬が南方に向かって翼をひろげて遠征を試みることを。転じて大事業を企てることとあります。その凶南会が上田松尾高校

1年の時に田中小学校の家庭科室で開かれ、先輩にいろいろなことを教えていただきました。思い出すことはY歌を歌ったこと、ストープの上のヤカンに酒を入れて、その酒をみんなと飲んだことです。

それから記念写真も撮りました。村の写真屋さんには誰が手配したのでしょうか。全員、詰め襟の学生服をきちんと着こんでいます。小学校の先生は一度も教室をのぞきに来ませんでした。この黙認は後の私たちの成長につながっています。

1982年に東京で「関東凶南会」と名付けて開かれてから、毎年開催されています。今年は30回目を迎えられるそうです。

第1回の案内状が手許にあります。世話人の3人は故人になつています。93年には20期の市村先輩が出席してくださいました。出席者は多いときは30人を越えていましたが、年々少なくなり昨年は12人でした。

宮坂幸雄(57期)